From Buddhism to Christianity

BY RYOUN KAMEGAI
Bungakushi

（傳道叢書第貳）

文學士 龜谷凌雲 述

佛教より基督教へ

近江八幡町
近江基督教傳道團

THE OMI MISSION.

傳道叢書

1、天造の神
2、佛教より基督教へ
3、生か死か
4、神か金か
5、己の罪か人の罪か
6、受くるより與ふるは幸也
7、祈る心
8、宇宙の人
9、信仰論
10、人としての責任
11、醒めよ
12、南無阿彌陀佛
13、喜んで苦しむ
14、ビックリ論
15、努力すべし艱難すべし
16、世界の大發見
17、埋れたる生涯

2は參錢、其他は壹錢五厘宛各百部以上は相當割引致ます

近江基督教傳道團

佛教よりキリスト教へ

私は今たゞキリストを信じ神にのみ事へて一生身も魂をも捧げやうと決心した許りの一人のいとちいさきキリスト教信者であります。キリスト教信者といふものゝ、キリストの愛に身も靈も奪はれてしまつて居るといふ丈けでキリスト教の事に就て餘の事は未だ何も知つて居る者ではありません。聖書さへ未だ皆熟讀して居ないのです。併しこれから飽く迄も研究したいといふ熱望丈は有て居ます。

扨て私が何うして始め非常に毛嫌ひし卑しんで居た基督教に入るやうになつたかといふことに就てこれか

ら陳べて見たいと思ひます。一體私は日本でも最も佛敎の盛んだといはれて居る越中富山在の一寺院の長男と生れ、父母の熱心な門信徒の助けに依て帝大の哲學科（宗敎學專攻）を卒業さして貰ひました。そして卒業の時の論文に寺の生れとして最もふさはしい善導大師の研究を出したのであります。それから本當か何うかは知りませんけれど傳ふるところに依れば私の生れた寺の先祖は、蓮如上人が昔越中へ下向せられた時御子の蓮誓といふのに一寺を建てさせられました、その蓮誓といふ方が私の寺の第一代で私がその第十八代目に當るのであります。母は私に幼少の時から宗敎のために一身を捧げて盡さんければならぬといふことを

始終申して居りますし、私も蓮如上人や釋迦如來以上の大宗教家となつて人類のために是非つくしたいといふ空想を抱いて居りました。併し高等學校へ入つてから段々と自分の眞價が解つて來て非常に悲觀し、死にたいやうな氣もしたことさへありました。併し宗教は斯ういふ自分のやうなものに對して安心の道を開いて呉れるものであると思つたものですから、それから眞劍に信仰の問題に心を寄せるやうになつて參りました中學時代は佛教の大家の書物なら何でも愛讀して居ましたが、これからはたゞ信仰に關する書物許り讀むやうになりました。大學へ行つてからは、近角常觀師の求道學舍に入り、卒業後もそこに居り、約四年間信

仰上の御世話になりました。近角師の信仰は強く私の心に影響を與へました。今も少からずその感化を感じて居ります。私の今日の信仰に猛進することの出來るのも、全く師の感化に依るのであります。師は飽く迄も信仰主義徹底主義で、總ての妥協を排して猛進されるのであります、併し四年間も私は師の御説教を聞きましたけれども、愚鈍なる私は何うしても阿彌陀如來を本當に信ずることが出來ず、寧ろ基督教の方が深く私の心に浸み込んだのであります。

昔からの基督教の聖徒の働らき、バンヤンの如き熱心なる信者、或はルーテル・或はオーガスチン、更に遡つては、ポーロの如き、深く〱私の心に惹きつけ

たのであります。尚ほ今日の救世軍の山室軍平氏の説教の如きは私に一言一句金玉として聞ゐるのでありました。實際考へて見ますとこの時分から私は深い神の惠を受けてゐました、バンヤンの天路歷程を讀んだ時などは言々句々一として要らぬ言葉は無いのみか、一字も殘らず私の心に總べて此の世に得難い寶玉と感ぜられ、而もその寶玉の山なすほど澤山あるのを見まして、私は全く、これは神が私のため、バンヤンに書かして置いて下さつたのだと感じて、神の御惠の深いのを心から感謝して居たほどであります。佛教に善導大師の二河白道の如き譬喩はあるけれど、その細をつくし微を穿つて、信仰の經路道程を示すことは到底この

天路歷程に及ばないのであります。私は佛教に何故この天路歷程のやうによく信仰の經路道程を寫したものが無いのかと悲しみました。

その後私は小樽中學へ行くことゝなりました。そのために暫らく宗教の空氣から離るゝことゝなつたのであります。併しこの間に暇さへあればプラトンやオイケン、ベルグソン、メーテルリングタゴール等の書を少しづゝのぞいて居ました。今から考へて見るこれらの人達は皆少しづゝ私の思想に力を與へて居ります。來世の存在の事に就て、吾人に神性の存在することに就て、或は造物主なる神の存在して我々がその子供であるといふこと、それから吾人の眞の幸福は見ゆる物質の上には無くて見へざる世界に存すること等、皆それ〲多少、私の心に力を與へて呉れました。

併し私は矢張り自ら佛教信者を以て任じ、自分の非常に能力の無いのを自覺し乍らも宗教のためにつくしたいといふ心が念頭を離れませんでした。然るに偶々昨年の秋となつて金森通倫氏が北海道へ特別傳道に御出でになるといふことを聞きました。豫ねて私はその熱烈なキリスト教信者で居られるといふことを聞いて居たものですから、小樽へ御出でになつたら是非會はうと思ひました。その間に私は氏が米國から御歸りの時祈りつゝ作られたといふ『信仰のすゝめ』といふ本を得てそれを讀み、その御出でになるのを待つて居ました。私はこの時分、宗教のない商業地なる小樽に居て、非常に精神の渇きを感じて居た時ですから、佛

敎であらうが基督敎であらうが、たゞ熱烈な信仰家の話が聞きたかつたのでありました。氏はいよ〳〵御出でになりました。私は會はうと思つて御宿へ行きましたが、丁度その時御宿の側を通つて居る、山奥の軍用道路の方に向つて遠く靜かに默想し乍ら御歩きになる後姿を見ましたので、私はその後を追ふて行きました。北海の九月の末、靜かなる紅葉の山奥で、このキリストの御再來とも思はれた氏に私は初めて言葉をかけたのであります。氏は段々と私の話を御聞きになり歩き乍ら私に親切なる御言葉を賜はりました。踵を廻らして歸途に就きましたが、話は盡きません。遂に御宿の前へ參りました。私はそこで御別れし、再會を約

して下宿へ歸つたのであります。翌日再び御目にかゝり、私の心の底にあり丈の疑問をすつかり話しました氏は一々私のために、あらゆる問題に對し、悉く解決を與へて下さいました。併し私はその時未だキリスト教信者にならうといふ氣は、つゆほどもありませんでした。寧ろ氏に遠慮なく私は、彌陀の本願は一切衆生のためであるから、日本丈でなく全世界に念佛を弘めたいものであるといふ希望を述べて置いたほどであります。その時私は、蓮如上人の御一代聞書を研究して居りましたから念佛は、支那印度濠洲西洋人にも皆信せしめたいものと思つて居たのです。併し角に角その時金森氏は、最後に別るゝに望み、私のため祈つて

下さいました。その祈りが、不思議にも私が生れてから聞いたことのない私に對する無限の同情を含み、私が前途に非常な光明と力とを與へることになつたのであります。

それから私は爲に非常に煩悶の時代に入りました。何となればキリストはなか〳〵自分の心を惹きつけるが、さうかといつてこれ迄の彌陀の信仰はさうたやすく捨てらるゝものでない。キリストを信じやうか？彌陀を信じやうか？彌陀を信じてキリストを菩薩と見たこともあります。キリストを信じてこれが彌陀の權化であると思つたこともあります。取つたりくづしたり、迷ひに迷ひ、惱みに惱み、何うしても解決がつかなかつたのであります。一層のこと兩者一體なりと主張する一新宗教を開からうかと思つたこともあります。併し私の力で一宗開闢などゝいふことは及びもないこと

でありますし、又こんな妥協、寄木細工は信仰的でないことは分りきつて居ります。早く孰れか一つを執ることに極めたいものと思ひました。併し道理からいへば、何れも優れて居つて孰れを捨てるわけにも行きません。といつて彌陀とキリストと兩者を並べて信ずるわけにも行かず、斯ういふ具合で久しい間惱んで居ました。

その中今春、富山中學校長の御同情と他の方の御盡力とにより私は、故郷の自分の出身の富山中學へ轉任することゝなりました。郷里の學校へ出たいといふのは私の宿願でありました。一家のために都合がよい許りでなく、郷里の教育に盡くしたいといふ心もあつたものですから。併しこの信仰上の問題が心の中にはげしく起つて來てから私は、到底久しく現狀のまゝ寺

に居り學校に出て居られないやうな氣がして來ましたこゝに大なる決心が必要となつて來たのであります。私が郷里へ歸つて來ますと間もなく私を寺の住職とする辭令が本山から參りました。併しその中、私の信仰が益々非常な波瀾を起した後こゝに、クリスチヤンとなることに、斷然決したのであります。その決した理由は、斯く兩者の心を寄せ、何時迄も迷ふて居るのは信仰的ではなく、所謂二兎を追ふ者一兎を得ずで假令一兎を捨てゝも一兎を得れば、一方に失ふたる缺陷は充分に補はれて餘りありと感じたからであります。然らば何故これ迄の佛教につかないで、それを弊履の如く捨て、たゞキリストにのみ賴ることになつたかと

申しますに、深い理由があります。

彌陀の五劫四惟永劫の修業といふも、これは何うしても事實であるとは思はれず、勿論これを信ずれば、それ丈の利益があり、又その中には深遠なる哲理もあることゝは思ふけれど、心にシッカリと事實であるとは信ぜられないのであります、信じたやうな顔は出來彌陀の御本願の話は出來、又これ迄おぼへたことであるから理屈をいはすれば幾らでも理屈はいへるけれど心の中には確と事實として信ぜられないのであります何だか作り事のやうに思はれて、信ぜられないのであります。然るにキリストの十字架の死は事實です。そしてバイブルを讀んでキリストの言行を見るとても

これは人間の言行でない、キリストは神であるといふことが、はつきりして來たのであります。私はキリストが神であるといふことは、聖書に現はれて居るキリストの言葉と行とによつて事實と確信するのであります。少しもその間に理屈は混つて居りません。そしてキリストの愛、その愛の無限なること、實に心も言葉も及びません。私の心がもう全部キリストに執らへられてしまつたのであります。キリストのことを知れば知るほど、底ひなき深い眞理の生命と力との源泉に觸れて、自分の眞に生くるの道を、こゝに初めて發見するに至つたのであります。これ迄つまらぬと思ふて居たことが皆有意義となつて來ました、これ迄死せりと

思ひしものが皆甦つて來るのです。實に晴れやかな愛と生命と力とに充ちた世の中となつて來たのであります。斯くして更に明にバイブルを讀んで行きますとキリストの御教は他の如何なる宗教にも劣らぬのみか如何なる宗教も全く比較にならぬほどすぐれてゐるといふことが段々と分つて來たのであります。實に基督教には眞宗も日蓮宗も禪宗も總べて含まれてゐて而もそれ以上であるといふことが私の心に明確になつて來たのであります。

佛教の教は尊といは尊といに違ひないが、これは釋迦といふ一聖者の御悟りになつた教です。その中の彌陀の本願といふも、釋迦の御悟りになつた最も尊とい

教の一つで、衆生を救ふの方便としては、佛教に於てこれくらゐ優れた道はありますまい。實に暗夜の燈火であります、燈火の中で最も優れた電燈にも比すべきでありませうか、併しこれは飽く迄も方便であり、釋迦の御慈悲から御考になつた方便の教であります。これは或時代には有効であります。今日でも、或人にはまだ信ぜられて居ます。併し今日の文化に浴し、新らしい教育を受けた一般のものには、何うしてもこの方便が利かないのであります。語を換へて言へば、信ぜられないのであります。如何に信じやうとしても信ぜられないのであります。信はこちらから努めて信ぜられるのではなく自然に信ぜられるのでありまするから

信ぜられる迄待てばよいのかも知れませんけれど、それを何時迄待てばよいのか、如何にも心もとない話であります。併し兎に角彌陀の本願はこれ迄は暗夜の燈明、殊に優れた電燈にも比すべきものです。ところがキリストの御教は方便を用ゐず簡明直截、キリスト御自身が神の子として總ての人類の罪のために十字架にかゝられました。遠き十萬億佛土を越ゆたる西方の淨土を望むより、この手近な我々と同様に衣食し我々と同様な悲哀と苦痛のごん底を御味ひになつた神の子キリストの御救は實に確實なのであります。而してキリストは神の子として天より降り給ふた方です。その御言葉は天よりの神の御言葉であります。即ちその愛の

御光は天日と等しいものであります。私は佛教を電燈とすれば基督教は日光であると信ずるのであります。電燈は地の光、日光は天の光、而して永遠に吾人を救ひ、吾人に限りなき生命と力を與へて呉れるのであります。論よりも證據、私は毎日これを實際心の中に經驗して神と偕に居ることを喜ぶことゝなつたので、理論よりも實際のこの經驗によつて遂にクリスチヤンとなることに決定したのであります。要するに、日蓮聖人もいはるゝ通り『佛教は道理なり』で、理の教であります。五劫四惟永劫修行皆是理です。私共の求むるところは理よりも事實です。而して世界に理でない實際の救主は何處を探してもキリストより外に無いので

あります。私は豫て、私の心身を投じて一生働らき得る仕事を得たいと思つて居ましたが、こゝに初めて私の仕事は、益々深く神の御心を知り、更にこれを人に傳へ、神の御國の建設に、この生命を投げ捨てゝ働くにあるといふことがわかつて來て、遂に決心してこれから專ら聖書研究に從事し、同時に實際の働きをしたいといふことになつて來たのであります。

私がこの決心をしてから直ちに來る私にとつての大問題は、從來の事情、關係、ゆきがゝりから全然絶縁しなければならぬことであります。これは容易のことでありません。母はこれを聞いて何と感ずるでありませう。これ迄寺や私のために盡して呉れた門徒信徒の

人達は何と思ふであらう。これ迄の先輩や友人達は何と見るであらう。そんな思ひや見方は何うであらうとも、私にとつて一番苦痛に感ぜられるのは、これ迄の大恩人達に對して一時非常な御心配を掛け、御迷惑を掛けることである、就中母は私にとつて一番の心配であります。母は私のクリスチャンとなるを許さぬのみか、祖先に對して濟まぬ、世間に對して申譯が立たぬとて一時非常に懊惱するといふことが眼の前に見ゐて居るからであります。併しこの時私はたゞ母がキリストの眞の愛を認め、私の向ふところに同意し、母も共に神の道につくして呉るゝやうになることを祈るほか私にもう道は無いのであります。母は或解釋の下に

一時同意しました。併し復た顧みて深き憂に沈みました。私は實に不孝の子であります。如何に信仰のためとはいへ、母に少しでも心配させたくありません。殊にキリストの教は人に心配させる教でなく、荏弱を體恤る教であります。愛の教であります。ですから何かして早く母に安心してもらひ、この最も幸福なるキリストの愛の道に入つて頂きたいといふのが私の衷心の願です。母は豫てキリスト教の事は讀書に依て充分了解して居りますから、やがて神の限りなき溢るゝ愛の御恵を感ずることゝ私は深く信ぜずに居れません。此他の問題も、固より私にとつては大なる十字架であり、苦痛であります。併し私はたゞこれから、墓地に

道に向つて邁進するより外に道はありません。キリストと共に十字架を負ひ、血に依て己れの靈と同胞の靈のために働く許りです。

私は佛教を輕んずるのではない。けれども佛教の目的が基督教に依て最もよく達せられると信ずるのであります。日が出てからなほ電燈をさもして置く必要がないと思ふのです。釋迦も親鸞も、その慈悲と救濟の目的が、優れたるキリスト教に依て充分達せられるのを御覽になつては、心から滿足されると思ひます。念佛もたゞの稱名が目的でありません、結局は信心が目的です、罪人を救ふのが目的です、その目的の信心が十字架に依て、最も完全に而も最も容易に得られる

とすれば、もう念佛が何の必要がありますか、キリストはこれ迄の宗教を破壞せんがために現はれたのでなく、これを成就せんため現はれたものであります。われ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿れ、來て之を廢るに非ず成就せん爲めなり(太五ノ十七)

尚ほキリストは完全なる人間、罪なき者のために御出たのでなく、私の如き不完全なる、私の如き罪ある者のために御出たのであります。

康强なる者は醫者の助を需ず唯病ある者これを需(太九ノ十二)

夫わが來るは義人を招ために非ず罪ある人を招きて悔改させんが爲なり(太九ノ十三)

一人の罪ある人悔改なば悔改むるに及ばざる九十九人の義人よりは尚天に於て喜あらん（路十五ノ七）

われら神を愛するに非ず、神われらを愛し我儕の罪の爲に其子を遣して挽回の祭物となり（約第一、四ノ十）

此の如く神われらを愛し給へば我儕も亦たがひに相愛すべし（約第一、四ノ十一）

われら神を愛するに彼まづ我儕を愛するに因り（同上四ノ十九）

神の愛は斯くの如くでありますれば神を信ずるなどいはれても信ぜずに居れず神に頼るなどいはれても頼

らずに居れないのであります。

エホバ（神）はわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。エホバは我をみどりの野にふさせ、いこひの水濱にともなひたまふ。エホバはわが靈魂をいかし名のゆゑをもて我をたゞしき路にみちびき給ふ。たとひわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ、なんぢ我とゝもに在せばなり、なんぢの笞なんぢの杖（敵を防ぐ武器）われを慰む。なんぢわが仇（惡魔）のまへに我がために筵をまうけ、わが首にあぶらをそゝぎたまふ、わが酒杯はあふるゝなり。わが世にあらん限りはかならず恩惠と憫憐とわれにそひきたらん、我はとこしへにエホバの宮にすまん（詩

篇二十三)

我等の行くべき道はもう神の道より外にありません。總べてを捨てゝ神に從はねばなりません。神の教は亦決して我國體と反對して居りません。

爾の父母を敬へ又父母を罵る者は殺さるべし(太十五ノ四)

衆の人を敬ひ兄弟を愛し神を畏れ王を尊ぶべし(ペテロ前二ノ十七)

併し固より形式的に敬し尊ぶのでは無く、信仰的に敬尊ぶべきことは勿論のことであります。

それ神の旨に從ふ者は是わが兄弟わが姉妹わが母なり(可三ノ三五)

もう他を顧みて居る暇はありません。直ちにイエスキリストに從ふて十字架を負ふ覺悟をしなければなりません。キリストは『我に從へ』と申されます。一刻の猶豫はそれ丈大なる罪を犯すのであります。ペテロはその網を棄てゝ直ちにイエスに從ひました（太四ノ二十）ヨハネは直ちに舟と父とを置てイエスに從ひました（同二十二）一切を捨てゝ從ひました（路五ノ十一）

我に從へ死たる者に其死し者を葬らせよ（太八ノ二十二）

手を犂に着て後を顧る者は神の國に當ざる者也（路九ノ六十二）

我が愛する佛教徒諸兄姉、徒らに空理の教に迷はさるゝことなく願はくば決心してキリスト信者となり、眞の生命と力とを得て、眞に生き甲斐ある生を送り、眞の幸福を神に依て得て下さい。

大正七年二月二十日印刷
大正七年二月廿五日發行
大正十一年八月二十日十六版
大正十一年八月廿五日十七版
大正十二年六月三十日十八版
大正十三年九月二十日十九版
大正十三年九月廿五日二十版
大正十三年九月三十日廿一版

著作兼發行人　滋賀縣八幡町池田町五丁目　吉田悅藏

印刷者　滋賀縣大津市四宮町二十二番地　奥村卯兵衞

印刷所　滋賀縣大津市四宮町二十二番地　大津商事印刷株式會社

發行所　近江八幡町魚屋町元二十九番地　近江基督教傳道團